

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

## 2011 年度第 4 回研究会報告書

### 東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触—タイ文化圏を中心として—

日時： 2011 年 10 月 16 日（日）午後 1 時 30 分から 6 時 30 分

場所： 東京外国語大学 AA 研棟マルチメディア会議室（304）

報告：

1. 立石謙次（共同研究員・東海大学専任講師）

「批評：栗原悟著『雲南の多様な世界—歴史・民族・文化』」

2. 寺井 淳一（東京外国語大学院）

「11-13 世紀のパガンにおける周辺諸地域との文化交流」

#### 報告の要旨

タイ文化圏は北においては中華世界、チベット世界、及びモンゴル世界とつながっているが、また南においてはベンガル湾の南アジアに広がる海洋世界と連続している。本研究課題では、この南北軸の視点からタイ文化圏の歴史・文化・言語を分析することによって、南と北に位置する民族と政権との交流の中で、タイ文化圏の歴史・文化・言語がどのように変化していったのかを明らかにすることが主たる目的である。この度の研究会では東南アジア大陸部の中にみられるインド世界との交流を取り上げる。事例として、パガンの寺院建築に見られるインドとスリランカといった南アジアからの影響について寺井 淳一氏に発表して頂いた。

また、本年 5 月に栗原悟氏が『雲南の多様な世界—歴史・民族・文化』を刊行した。これは通史の視野から、雲南の歴史と文化を取り上げた最初の和文書物である。歴史学の立場から、立石謙次氏に批評をして頂きました。（唐立）

#### 1. 「批評：栗原悟著『雲南の多様な世界—歴史・民族・文化』」

本発表では、栗原悟著『雲南の多様な世界—歴史・民族・文化』（2011 年、大修館 221 頁、以下「本書」と表記する）の批評をおこなった。本書は、中国の再西南端に位置する雲南地方の歴史や文化について書かれた概説書である。

本書の記述にしたがえば、「雲南とはどのような世界か、雲南がいかんして多様な世界を形成してきたかを少しでも理解」してもらえるように執筆したという [本書 p.215]。また本書は、「これから雲南について調べる、あるいは研究しようとする読者」を対象にして

いる。[本書 p.215]

本書は雲南の歴史に多く言及していることから、主に歴史の方面から、雲南地方の民族・文化等の形成を説明する意図がみられる。本書の特徴として、雲南の自然地理、歴史、民族・文化など、一般読者が求める情報が一通り略述される。特に雲南の自然地理、自然景観に関する記述は、一般読者の興味にも益する。著者が指摘するとおり、これまで日本において、雲南地方の歴史・民族・文化に関する総合的かつ概説的な一般読者向け書籍は少ない。雲南研究を専門とする私にとっても、雲南に関する概説書が出版されたことは喜ばしい。

ただし一方で、著者の意図が不明な部分、あるいは検討すべき課題がある。まず本書が参考にし、紹介している文献のほとんどが 10 年以上前に出版された中国語書籍である。いわゆる入門者がこれを入手し、読みこなすことは難しい。一般書の性質上、学術雑誌に発表された論文をいちいち紹介することは不要かもしれない。しかし、ここ 20 年来、日本においても雲南地方に関する研究は、多方面で進展している。本書には、近年の日本における研究動向が反映されているとはいいい難い。このような情報こそ、入門者が求めるものではないだろうか。

また歴史に関する記述に注目すると、明白な史料の読み違えがみられる。著者自身が中国の研究書をそのまま引用し、原史料を参照しなかったのではと、疑われかねない。一例を挙げれば、唐代雲南地方に展開した南詔国末期に製作された、『南詔中興画卷』（いわゆる『南詔図伝』）の内容を紹介する部分がある [本書 p.81 l.12]。しかし、その内容は明らかに元朝時代の『紀古滇説原集』の記述内容である。そのほかの部分でも、安易に中国側研究を引用したための史料解釈の誤りが散見できる。

また瑣末な問題かも知れないが、単純な表記の誤りが非常に目立つ。特に顕著な誤りとして、民国時代雲南の政治史における重要人物である「龍雲」を「劉雲」と誤っている部分が十数ヶ所にもわたっている。むしろ正しく「龍雲」と表記されている部分のほうが少ない。著者を含めた雲南地方史の専門家であれば、このようなことは問題にならないかもしれない。しかし一般読者を対象に書かれた本書でこそ、このような単純な誤りは残念である。次回の著作にぜひ期待したい。(立石謙次)

## 2. 「11-13 世紀のパガンにおける周辺諸地域との文化交流」

11 世紀から 13 世紀にかけて栄えたパガン朝は、周辺の諸地域から様々な美術的要素を取り入れながら、その建築と美術を発展させた。その初期においては、パガン朝に先行するピューやモンの影響が見られるが、ピューに見られた大乘的な要素はパガンに受け継がれず、モンを経由してパガンに導入されたと思われるクメールのトーラナ装飾はパガンにおいて広く用いられる結果となった。その一方で、インドに由来する建築様式や美術的要素はパガン朝の初期から見られ、それらがパガン朝を通して広く用いられていることから、インドとの交渉が密であったことが窺い知れる。

今回の報告では、以上のような状況を踏まえた上で、今年 9 月に行った現地調査の成果を中心に、インドからの影響の一つとしてヒンドゥー教的要素あるいは密教的要素を含む図像を紹介し、13 世紀のパガンにおけるインドとの文化交流の一端を明らかにした。まず、ヒンドゥー教的要素を含んだ図像に関しては、獣に騎乗した人あるいは神の図像を取り上げた。この図像群は、寺院の四隅や壁面の端や天井装飾等の様々な箇所を確認でき、13 世紀のパガンにおいてある程度流行したモチーフであることが分かる。こうした図像の最初の例はアベヤダナー（11 世紀末～12 世紀初、寺院番号 1202）であり、そこではナンディンに乗ったシヴァ等、明確にヒンドゥーの神々と識別できるものがある。今回紹介した 13 世紀の図像群も、ヒンドゥー教に由来する図像であると考えられる。こうした獣に乗ったヒンドゥー神像は、パガンの壁画において仏伝図の一つである「降魔図」においてもマーラの軍勢の中に見ることができる。同じ状況は 8 世紀から 11 世紀の東インドの彫刻にも見られ、その影響を指摘すると共に、パガンにおいて単独で描かれる獣に騎乗した図像群は「降魔図」のマーラの軍勢から派生したものと考えられ、寺院全体で「降魔」の空間を表現したものである可能性を指摘した。また、今回の発見として、上記の獣に騎乗した図像の中に、ヒンドゥー教の神話から着想を得たとと思われる図像を幾つか紹介した。

密教的要素に関しては、チベットの憤怒尊に似た六臂の護法神等が見られるので、密教がパガンに伝来していたのは確かである。しかし、密教の図像を代表する四仏や五仏についてはパガンでは一切見られない。その理由として、パガン朝以前から存在した過去四仏あるいは弥勒を含めた五仏の思想とそれに伴う美術表現が、インドから伝来した密教の四仏・五仏の思想と融合し、表現としては過去仏の形態を取りながらも、密教の思想をも内包した形でパガンでは四仏・五仏が制作された可能性を指摘した。それを裏付けるものとして、単に過去四仏を表現しただけとは思われない図像を示した。

以上のように、パガンではインドから伝来したヒンドゥー教的あるいは密教的な要素が寺院の様々な箇所において見られる。碑文から確認できるように、当時のパガンには多くのインド人が来ており、これらの図像は彼等との文化的交渉の痕跡と見ることができる。（寺井淳一）

いずれの発表に対しても活発な質疑応答が行なわれた。『雲南の多様な世界—歴史・民族・文化』については、多くの事実誤認が新たに指摘され、さらにその基本姿勢に対して、この 25 年間の間に、大きな進展を見せた日本と欧米の研究は参照されていなく、中国の文献に頼り過ぎているため、中国王朝の立場から抜き出ていると、やや古い概念で歴史を叙述したことが惜しいという意見が、複数の参加者から提示された。また、本書から欠落している重要な歴史課題としては、（1）非漢族政権の実態や非漢族社会組織の在り方、（2）漢族移民の概念と意義 （3）非漢族による蜂起と漢族移民の山地進出などが指摘された。さらに、本書ではチベット語やタイ語などが漢字で表記されており、現在の研究水準からしてカタカナで現地語読みを明示することが要求されている点が表明された。

寺井氏の発表については、議論が壁画の図像の意義と調査方法に集中した。パガン仏教

の特色は何であったかを考える時、13世紀に hindhu 教的な要素がこれまで考えられてきたより多かったという意見が出された。また、検討すべき問題として、mranca 奴隸 や kula 奴隸が描く内容はパガンの信仰の対象になるという解釈はできるか、また同時代の人、仏教的な要素、密教的要素などがどのように理解されていた、さらに13世紀の壁画の描き方の特徴は何であったのかなどが提示された。(唐立)